

上田早苗×陰山英男

「小学校の現場から」



Hideo Kageyama

1958年兵庫県生まれ。兵庫県朝来町立山口小学校教諭。同校での基礎学力形成の取り組みがNHK「クローズアップ現代」で紹介され、話題となる。著書に『やつぱり「読み書き計算」で学力再生』(小学館)などがある。情報教育や国際理解教育など、多面的な実践にも定評がある。「落ちこぼれをなくす研究会」常任委員。

上田 陰山先生の執筆されている『やつぱり「読み書き計算」で学力再生』などを読ませていただき、とても共感しました。私は親の転勤などでスイスにやつてきた子供達を教えた経験がありますが、彼らはスイスの学校でドイツ語、インター・コミュニティスクールで英語などの勉強をしながら、日本人学校の補習校にも通っていて、日本にいるときよりも学習の負担が相当大きくなるんですね。そこで子供達に残された少ない時間で効果的に教

えるために、自分達で文部省から送られてくる膨大な教科書や通信教育の教材をばらばらにしました。どこが骨で、どう教えたら一番合理的かということを、もう一度自分達で構築していったんです。一学期と三学期で学ぶ項目をくつつけた方がわかりやすいのでは、とかいろいろ工夫しました。そうやって教科書単元のつながりを考えているうちに、なぜ子供のレベルで自然に次が欲しくなるような積み上げをしていないのか、すごい不思議だなあ、合理的じやないなあと疑問に思つていました。

陰山 そうですね。例えば「百ます計算」にしても教科書の単元を無視してゐるわけだから、普通に指導要領に則つてやつている先生からは邪道に見える。ただ、生徒の視点にたつて、生徒がよくなることが一番だ、つていうのが基本ですから。

上田 陰山先生にお目にかかるて、それを純粹にやつておられる方に久しぶりに会つたという気がしていります。しかし、どうやつて子供達に飽きさせないで、百ます計算などをやつておられるんでしょうか。最初嫌がる子などもいると思うんですけど。飽きるつていふのは飽きる以前にやりたがらないという意味で、やる前にこんなものはくだらないだとか、ある程度年齢がいった子供は特にそう思うのではないでしようか。

陰山 これは悪く言つちやうと、だま騙しちやうんですね。「嫌がつてもいいよ。でも一ヶ月騙されたと思つてやつてごらん。やつてゐるうちに、必ず力がつくから」と。「今まで何百

人と教えてきて実は全然伸びなかつた子は一人もいないんだ。あとは君達がやるかどうかの問題なんだ、君達はどうする」と投げかける。だからそこで子供達に一度決断をさせるわけですよね。子供達の中に伸びたいという気持ちはあるわけだから、それを刺激するんです。最初子供達は、しんどいからいやだと思つたり、あるいはやる前から失敗したときのことを恐れているわけですよ。でも、これをやれば絶対力がつくんだと子供が信頼してくれれば、実際努力してくれるし、また必ず伸びるんです。

上田 これをやっておけば大丈夫という安心感を与えることも大事なんですね。けれど、逆にうまく伸びてくれない場合はどうしますか。

陰山 もちろんすべての子が同時に伸びるわけではないのですが、もし伸びないとしたらいろんな要因がありますよね。子供達がなぜ伸びないか原因を一つひとつ詳細に分析していく。家庭的な要因であるとか、ごく稀に^{まれ}能力的な問題であるとか。ただそうやっていくと原因つていうのはそんなに多種類あるわけじゃないんです。だいたい原因を特定できるんです。そうするとある程度こちらの対応もマニュアル化されてくる。だから、ほくらの学校の基礎学力定着の実践をそのまま鵜呑みにしてやってもうまくいかない、と言つて電子メールなどで相談してこられる方がいるんですけど、大概はまたこちらからのアドバイスでうまくいっているようです。

上田 その教えることに行き詰まつての電子メールでの問い合わせや相談内容というのは、他にどういうことが多いのでしょうか。

陰山 大抵は単純な内容です。思つたように百ます計算の記録が上がらないといつて焦つたり、すぐ結果を求めることがらくる焦りからの相談が多いように思います。人の能力はある時期、努力してもずっと伸びないでいて、ある時期がくるとぐぐつと階段の段を上がるよう飛躍的に伸びるものですから、焦る必要はないのですが。

上田 先生や親が必要以上に過敏になつていることもありますよね。しかし、どうして過敏になるのでしょうか。

陰山 ぜんぶ教師や親のせいで子供が伸びたり伸びなかつたりすると思つてているからではないでしょうか。親もこうでなきやいけない、つていう強迫観念のようなものがあるからではないですか。子育てでも、そんな思うようにうまく育つ訳ないんだと開き直つてしまつたら、全然どうつてことないんですけどね。子育てに絶対失敗が許されないなんてことはなくて、試行錯誤の中でしかできないはずですよ。

上田 そうですね。これは私が学校を開こうと思った理由のひとつでもあるんですが、日本でうまく行かないからと言つて、とても安易に、若年の留学生を海外に連れていくことが多かつたんです。でも日本でうまくいかない人間がむこうでうまくいくわけがない。そ

して親はお金だけを送つて、海外で直接目に見えないから勝手に安心している。実際は高校一年生でも小学生レベルの勉強をしなくてはいけない学力なのにもかかわらず。これを見ていて何か違うな、迷惑をかけるなら自分の国にかけるべきだなあ、と。

そうやって自分でフリースクールを作ろうと思ったときに、一番ネットになつたのは先生の選択でした。先生の力量、技術もそうですが、それ以上に人間としての魅力、先生がご自分の教える科目なり事柄に対して強い憧れあこがを抱いているかという部分を重んじました。

陰山 確かに日本には教師の力量や技術で子供を育てるという迷信があります。ある意味、職人芸のような。しかし個人技のようになつてしまふと今度は六年間でどう伸ばすのか、九年間でどう育てるのかというように、学力作りを教師が連携させて進めるという発想が抜けてしまいます。

僕らも百ます計算とかやっていますけれど、こればかりにのめり込んで、これがすべてだと思つちやいけないと思つています。あくまで次のステップに行くためのトレーニングですから。ただ長年「落ちこぼれをなくす会」などで研究してきて、現在はあれ以上に短期間で基礎計算力をつける方法がないんです。

上田 確かに日本の中でも、都市部とそうでないところで地域ごとに子供達も違うわけですし、親の職業や風土などの影響を受けてまた違つた反応が出できます。ただ、どこへ行

つてもいいものはいいわけですから。だから百ます計算などは他の国へ行つても評価されると思つています。ただ取り組み方や、方法論が違つてくるということなんですね。

陰山 そうですね。

上田 私の経験では家庭が学校に要求するものが大きすぎたり、結果を性急に求めたりしそぎるのでは、と思うんですが、先生は実際にお仕事されていてどう感じるでしょうか。

陰山 期待が大きいというよりも、家庭が家庭としての本来の機能を果たしにくくなつてきたという気がします。

上田 期待というのならないんですけれど、問題を何でも親が学校に投げてよこしてしまいうというような傾向はありませんか。

陰山 あるかもしれません。でも、うちの場合はだからこそ、投げてよこされる以前に、逆に家庭にこちらからこれだけのことをしなきやダメですよ、というように家庭に呼びかけ、情報発信をしてきました。それが良かつたんだと思います。

ですから、そんなむちやなことを言われるることは少ないですし、たまにあっても職員室でみんなでどうするか話し合いますので、保護者のクレームで悩むということはあまりないですね。学校ぐるみは必然的に地域ぐるみに発展していくんだと思います。その分保護者の方は大変だつたと思いますよ。

上田 それは具体的には、子供がきちつと朝食を取ることの徹底指導だとかそういうことですね。

陰山 そうです。ただ家庭の教育のせいというより、もう少し突き詰めて言うと、日本そのものが子供の存在を許さない構造になつてきていると思います。要するに、教育問題のなかで一番象徴的に表れている数字というのは出生率だと思うんです。現在、日本の出生率が一・三～一・五人の間の数字になっていますよね。そういう数字を見ると、まず子供にすらなれない世の中、社会そのものが子供の存在を許さないような時代にまで来ていると感じます。私達の地域但馬たじまでは、あの広い地域、兵庫県の北四分の一くらいですが、中学校三年生、一学年に二八〇〇人しか生徒がいないんですよ。それだけじゃありません。去年生まれた子供達は一六〇〇人です。かつて神子畠かごばたという地域には鉱山があつて子供が三〇〇人いたのが現在一人です。今まさしく私たちが直面している問題は、子供がいないということです。子供がいなくなってしまえば社会も子供に合わせる必要がないじゃないですか。そしてますます子供がいづらい社会構造になつていくのではないか、そんな不安があります。

子供がいなくなつたらこの社会が存立できなくなるということは分かりきったことなのに、いまだに教育に、子育て支援にお金も手もかけようとしたい社会。銀行の救済も必要

かも知れませんが、もつと深い危機が進行してゐるんじゃないでしょうか。

上田 そういう意味でお金の使い方が下手ですね。

陰山 お金の使い方で僕が一番憤りを感じたのはバブルの時です。日本人が何をしたかといふと、サークィット場を作った、わけのわからん絵を買った、要するに金の使い方が下手だと、いくらお金があつても社会を良くしていくために使われないと失望しました。じゃあ僕らの役割は何かと言つたら、生まれたくても生まれて来れない声なき者の代弁者じやなきやいけないと思うんですよ。だから僕は社会に対して徹底的な頑固者になる。

上田 そうですね。何でも自由ですって世の中はないんですから、子供に対しても大人が壁にならなければいけない時があると思います。誰も壁にならなかつたら、自由と表裏の義務や責任も学べない。でも周りに壁になつてゐる人がいれば、子供はそれをどうやって飛び越えようかと工夫する。そこが説得したりするコミュニケーションの原点になるのではないか。でも今は全部自由だつて言つてしまつてゐる。だから私も物分かりのいい大人じやなくて、頑固者が必要だと思つてゐるんです。

陰山 例えば若者達つていうのはいろんな変なことやり出すじやないですか。そのとき私達大人が頑固者になつて駄目だつていいます。駄目だつていうけれど、若者の中にそれでも乗り越えようとする本物の気持ちがあれば、その時その子は決意すると思うんです。今

に見とれ、と。だから僕はいいと思うんですよ。例えば、野茂が海外に出るとき、足引っ張つたりする者がいた。けれど、野茂はこんちくしようと思つて出ていて、成功したわけですね。だからそういう面でみると、今の若者も捨てたもんじやないなあ、と思うんです。スポーツの世界では野茂のような人間が出てきている。でも一般のいわゆる知性を司る分野で、そういう若者が出てこない。あるいは二〇世紀文化を破壊するかのような恐怖心を与える知性が若者の中から出てこない。

上田 本当に元気のいい若者つていねですよ。みんな穏やかで。

陰山 これは時代背景も大きいと思うんです。東西冷戦が終わって対立がなくなっちゃいましたね。対立がなくなつたら後は失敗しないのがいい。しかし本当はもう少し学校の中に対立する異文化、ぶつかりあう異質なものがあつていい。多様な知性が出てきていいと思うのだけれど、冒険がなくて手堅く失敗がないのがいいとされる。これは日本のシステム的な問題だと思うんですけど、そういうなかで教師というのは手堅いかなきやならない職業のひとつとなり、官僚的に失点をしないようになつてきたと思うのです。

上田 私が教育実習に行つたとき、校長と教員が対立していて、生徒が完全に置いていかれている。それを見て、教師にはなるものかと思ったことがあります。今先生の方でこれをこう教えたい、伝えたいんだという部分がない、あるいは打ち出せないのが問題なので

はないでしょうか。

陰山 教師が官僚的になってしまったから、そういうことも起きるんだと思います。

上田 勉強ははじめ強制の側面があつて当たり前ですが、たとえばお箸はしを持つ訓練をしなければ食べられないと同じで、鉛筆が持てなければ先に進まない。つまり基礎訓練的な勉強があつてはじめて自発的な学問、自分からの学びに変わつていくんじゃないかと思うんです。だけど、勉強さえやつていればいい、塾に行くなら掃除当番をやらなくてもいいと大人が許してしまつた。それが受験などで極端になつた時期がある。しかし、その反動として今度は、勉強を強制するのはいけない、となつてしまつた気がします。

陰山 ただ、小学校の現場にいるとね、勉強のできる子にしなきやいけないというプレッシャーを僕はあまり感じたことがないんです。これはおそらく、小学校と中学、高校が別の論理で動いているからだと思うんですよ。小学校は德育重視で、中学校に入った途端に受験しなきやならないからまったく別の論理が働いてきます。

上田 これは東京だけなのかもしれないんですけど、いま高校で生徒をあまり取らない学校があるから、中学で受験して入ろうという競争があります。

陰山 そういうことは小学校の側はむしろ奨励しょうれいしないし、小学校側は受験にはアレルギー意識があるんですよ。

上田 学力低下や学級崩壊の問題など一気に問題が噴出してきましたが、そのことに対するお考えですか。

陰山 学力を伸ばそうとしても、朝ご飯を食べてきていなから子供達が踏ん張れないようなことがあります。また自由にさせれば暴れたりして授業にならない。そうやって子供達の根本の部分が崩れているから、学校ではもう対応できないことが、学校で表面化しているわけです。

上田 それは家庭が良くないという意味ですか。

陰山 いや、それは家庭 자체がもう社会の中に飲み込まれていますからね。単純に家庭が悪いとは言えません。例えば男女雇用機会均等法といつても、女性が働くようにするだけじゃなくて、男性が早く家に帰れるようにするのが本当の意味での均等じゃないかななど思います。

ところがそうじやなくて、女性が社会進出して働くことがいいことだと、部分的なものが突出して主張されているように思うのです。結局男性も女性も働く時間が長くなってしまう。男性と女性というものが水平な土壤のうえでいかに仕事ができるかという競争をさせられる訳でしょ。子供の頃に深夜一時二時まで勉強したという経験を持つ子供達がサラリーマンになるわけですから、午前一時二時まで仕事をするのは当たり前じゃないですか。

結果子供を育てる社会がなくなっている、そういうことだと思います。だから私たちは何を考えなきやならないかつて言つたら、まず子育ての喜びを思い出さなきやいけないんだと思います。

上田 結局みんな、学校が悪い、親が悪いと言い合つて、本当のところ本質を見ていない、私はそう感じます。陰山先生は学校の役割、家庭の役割という部分ではどうお考えですか。

陰山 僕は極めてシンプルに考えています。学校は勉強、家庭は子供の心や健康を育てるところだということです。私達はお互いがそれぞれの役割を果たし、それを地域社会のかで融合していって、社会に役立つ人間を作ろう、という極めてありきたりなことをやつてきただけです。確かに受験競争の構造には問題があります。しかし、だから勉強させないという極端な姿勢ではなくて、基本の学習はしつかりやつていく。

上田 陰山先生のを目指す子育て、教育とはどんなものですか。

陰山 うちの学校は「読み書き計算」というイメージが前面に出ていますが、たとえば運動会であれば、縦割り集団を作つてね、それこそ授業そっちのけでまるまる三週間運動会をやるわけです。そうすると縦割りで行うものだから、運動会が終わつた後でも休み時間、六年生の子が一年生の子を肩車かたぐるましてやつて、中庭でごく普通に遊んでいるわけです。そこには昔あつた子供社会というものが見事に学校の中で再生している。このように子供達が

必要としているものを、そのまま与えたい。僕はこういった「元祖学校」というものをかたくなに守っていきたいと思っています。

上田 私も子供を見ていて気になるのは、他人が困っていても何もしない、つまり他者に無関心なことです。年上だろうと年下だろうと、伝えたいことを伝えていくのは基本です。だから私は学園に年齢制限は設けないんです。

陰山 とにかく子供社会がないことが問題ではないでしょうか。誰かと遊ぼうと思っても、みんな塾に行っちゃうし。僕は子供に外で遊んで来いと言うときにつつと思うんです。五〇メートル先に公園はある。でもその五〇メートルの間には車がびゅんびゅん通る道がある。そうすると、公園まで親が連れて行ったりして、もうこけた、喧嘩したと、すぐ親の手が出てしまうわけですよ。もう過保護にならざるをえない状況があるわけです。たつた五〇メートルの道、それが子供社会をつぶしてしまっている。こんなことを私はわが子を育てる中で感じました。家庭の過保護もおかしいが、社会の無保護もおかしい。犯人さがしと対策ばかりを話し合うのではなく、もっと根本のゼロベースから考え始めるることはできないものかと思います。

上田 そういうご自身も過保護にならざるをえない状況にいらつしやつて、どこか自信を失いかけている親や先生にメッセージを送るとしたらどんなことを言いたいですか。

陰山 難しい質問ですね。親や先生は、学校っていうのはもともと子供が問題を起こすのが当たり前ですから、まず神経質にならないことだと思います。山口小学校は問題が起きてるそれにフレキシブルに対応できるよう、現実的な意味での理想的な学校作りを目指してきました。そのために、子供に普段からできるだけ多く関わるように努力してきたという自負があります。

また多くの批判を浴びながらも、実践を続けることができたのは、ただ一点子供が伸びるという事実があつたらです。子供が伸びるという事実を作ろうよ、その事実から考えようよ、と話し合いました。

最近、ゆとり教育の反対の極に山口小学校があつてというふうに言われてしまふけど、そういうわけではないのです。理念で教育を考えるのではなく、子供の事実を第一に考えてきたことが一番のポイントだと思うんです。僕は元祖学校をやってるだけなんだと。元祖学校とはいつたい何だといったら、それは子供がすくすく伸びていくこと。それにゆとりだ何だという理念をつけるからややこしくなる。まずは子供が伸びるというひとつ的事実から物事を考えていきたいのです。それはどういうことかというと、事実を自分の目で見て耳で聞くことです。今はこれがないんですよ。

今教育の現場は多くの批判にさらされています。だから、それに対応するためある一定



の予定された成果なり結果を無理矢理つくるなければいけないようになっています。だから実践が後手に回ってしまうのです。

上田 子供が伸びるというひとつの事実から物事を考えていくというお考えを持つに到つたのは、どうしてでしょう。

陰山 四年連続、同じ子供達を担任したという体験に始まっています。普通大体一年か二年ですよ。ところが普通では考えられない四年という期間、担任をやつたことで、子供達はこちらが考へていてる予想を越えて、はるかに伸びることがわかつたんです。いろいろな批判や社会で語られていること、それらは目の前の事実とは全然違つていました。読み書き計算などの力をつけることで、子供は何より人間的に素晴らしいなっていくという手応えが感じられました。

知育が德育を伸ばす。これは理屈ではないんですよ。事実があつて、じゃあこれを普遍的にやるためにはどうしたらいいかと考えました。その結論として、徹底的に基礎を反復して習得していくというシステムを学校のなかに定着させる提起をしたわけです。これは最初から、基礎をやれば子供が伸びるという理念があつたわけではありません。はじめ低学力の子を伸ばすために基礎を徹底して、その結果子供が想像できないほど伸びたという発見をし、そこから出発していくのです。

子供達が伸びるためにはある一定の普遍性がある。それは何かと突き詰めていったら、言語であるとか計算であるとか、基本的な力を活性化させることに尽くるということがわかった。そして考えてみたら、それは何も新しくはなく、江戸時代から寺子屋だとかそういう形でいっぱいあつたわけです。

上田 寺子屋というのも単純なことを繰り返しやつて、定着していったわけですね。私は他人と比較しないので、その子の昨日としか比べないんですが、そうすると小さな変化でも非常に励みになるわけです。しかし、子供が他人と比べてばかりいると目先の数字、点数だけが大事になっちゃうんです。しかし点数を取るというのは、その時だけできただであって、終わればすぐに抜けていく。もちろん受験用の暗記のトレーニングも必要だけれど、しつかりした基礎がないとダメだと思います。

私は不登校の生徒の大部分は、基礎学習ができるようになるとかなり不登校は解消されるのではないか、と思っています。基礎さえできれば学校に行つても、先生の話がわかるから面白いというように変化していくはずですから。

陰山 そうですね。

上田 親の側から言うと、近年主婦なんてつまらないという風潮が生まれているように思います。別に働いても、外に出てもいいんですけど、主婦なんてつまらないという考え方

ではやはり家庭でいい子育てはできないんじやないかと思います。だったら、本当のプロの主婦になつたらいいと思うんですけれど。

陰山 子育ての喜びというのを親が思い出さないと。今はそれがちよつと置き去りにされていますよね。

上田 そうだと思います。だから今、子供を負担だと、邪魔とかいう親が現れてしまう。子供をペット化してしまう。自分の言うことを聞いているうちはかわいいけれど、ちよつと反抗し出すと、何でそういう子になつちゃつたんでしょうと言つて、慌てて手を離して、誰かにお願いしますとなつてしまふ。親も人格があるし、子供も人格があるわけだから、親はご自分の生活をきちんとしてください、と言いたくなつちやうんですけど。

陰山 僕もそのところですごく詰まつてきていると思うんです。僕らなんか学校でやれそうなものってのはやれるだけやつてきたつもりなんですよ。しかし現実にうちの学校でも、最近登校拒否ぎみの子が出てきた。私達もいろいろ悩んでいます。

今僕自身でやつているのは、特別な用がなくても気になる子の家に電話して、「気にかけているからね」というメッセージを送る。家にいても先生の声を聞けるようになると、学校と家庭との間の境界を薄めていこう、と考えています。そして、それは子供達の心にもそれなりに響いているようなんです。しかし、これとて家庭の方でそれなりのフォロー

があればこそ効果を上げているわけです。しかし、今後はその程度では対応できなくなってくるかと思うのです。

上田 それはよくわかります。たとえば、学校の先生になっている友達がいて、話をきくとクラスにそういう不登校の子が何人もいる。そうするとその子供のケアだけでクラスのことは何にもできなくなつちゃうっていうんです。保健室登校の問題もありますし。

だからもうガタがきてる日本のシステムを変えなきやいけないんだけど、どこから手をつけていいか、わからないでいる状況だと思うんです。学校側だけじゃなく、もちろん親も参加しなければいけない。でもそういう意識のない親もたくさんいます。

陰山 そうですね。今、そのところに手をかけなきやいけない時期に来てるんだと思うます。自由な校風が特色のある私立学校の先生と話す機会があつたんですけど、その学校は子供達に強制しないらしいんです。実際そうやって立ち直つていく事例があつたので、不登校の子がどつと集まつてきているらしいんですね。クラスに三割くらい不登校傾向の子がいる。そうするともうその子供達のケアで手一杯なんだそうです。もっと積極的ななかたちの教育をやろうと思つても、結局ケアで終わってしまう。これは対策的な教育をしていても対応できない段階に来ていることを意味していると思います。

そもそもゆとり教育というものがなぜ出てきたかというと、これは突き詰めれば不登校



対策だつたと思うんです。公教育にとつて学校に来ないというのは、実は一番やっかいな問題でね。来てくれば何とかしようもあるけれど、来なかつたら打つ手がない。來てもらうためには、もうハードルを下げるしかないわけです。僕はゆとり教育はある面そういう取り組みだと思います。ところが、ハードルを下げたら子供達は飛びやすくなつたのではなく、ハードルに合わせて足の力を弱くしてしまつた。結果、ゆとり教育のマイナス面ばかりが目に付くようになつてしまつたんじゃないでしょうか。

上田 不登校の子に何が何でも学校に行きなさいという強制のメッセージは有効だと思えませんが、逆に親が率先して学校を否定するような姿勢でもいけないと思っています。小学五年生から中学三年生まで不登校を続いている子の親御さんは、学校など行かなくてもいいと言っています。じゃあ、どうやってお子さんは食べて行くんですか、と聞いたら、コンピュータをやるからいいんです、と言うんです。コンピュータといつてもプログラミングなどのレベルでなく、単にインターネットができる程度ではどうにもなりませんよ、と言いましたが。また驚くことに、未だにお母さんは子供がどこに行くにもくつついいく。

陰山 母子密着が強すぎてなかなか自立できないでいる子の話を聞くことはあります。けれどやつぱり理解できない、本当に原因がわからない不登校のケースもあります。そういう

うふうに考えていくと、僕らが普通に当たり前にやっているものが、ある子にとつてはごつそり抜けていて、その部分を僕らは十分理解できていないから、慌てちやつてているんだと思うんです。そのところに合わせて教育もやつていかなければいけない。

ただ現実問題、不登校や引きこもりなど当面そういう子が出てくることは想定してからなきやいけないわけです。だから社会にセーフティネットを張つて、フリースクールやフリースペースといったところに頼らざるをえない。そういうつなぎ役が社会的にもつと必要だと思います。

上田 確かに徐々にフリースクールは認知されてきています。NPO法人の申請をして助成金を得るところもあります。しかし、いろんな意味で地域社会との連携があつて、世界を広げていかないと限界が見えてくるのも早いと思うんです。だからうちでは風通しを良くしようと、学園で教える以外に職業を持つていらっしゃる方に先生をお願いしています。そういう学校から周りの地域への広がり、という面では先生のところはどうでしょうか。

陰山 うちは約八割の子が農家の子なんですけれど、そのうち稻刈りを手伝つたという子はほんのわずかしかいないんです。つまり、学習つてものが、頭と目と耳だけになつてしまつている。身体でやっていない。体験が足りないってことはゆとり教育でも言つてますけれど、それは確かにそうなんですよね。皮膚で勉強していない、というか。暑ければク

トラー、寒ければヒーター、それで身体が身体として機能していない。それは都会の子も田舎の子もいつしょなんです。「何でこんな寒い日に学校行かなきゃならんのだ」とか、その中でみんな学校へ行く意味だと考へるわけですが、今はちょっとしたことで親が車で送るんですよ。雨の日になると高校なんか前にずらーっと車の列ができるといいますから。それはむしろ都会よりひどいかもしません。

とにかく少しでも子供が躊躇かないようにしてしまって。だから、上田先生がおっしゃるように、自分で決断して、自分で選ぶということがない。だから傷つくことがない。

上田　だから転んでも立ち上がって、自分の傷にこうやつて睡をつけるとか、もつとひどかつたら近くの家でおばさんちよつと洗わせてくださいとか、そういう考えが思い付かないんですね。

陰山　それで僕はもう傷つきなさいって言います。本当に今度の僕の学級は傷つきやすいガラス細工ばかりでね。だから僕は時にはこつそりいじめてあげるんですよ。何か困っているとき、「ぼちぼち泣く時間じゃないの。泣くんか」と言つてね。そうすると、こらえて、「うーん」という顔してますけれど（笑）。

上田　そこで先生は泣かしちゃいけないと考へてはいけないんですね。すると結局、先生も生徒もある程度距離を置いた方がいい訳ですね。

陰山 そうです。同化しちゃうからいけないんですよ。この前ハロウイーンの国際交流パーティに行つた小学五年生の女の子がね、福笑いのゲームをやるのに慌てて行つたもんだから使うセロハンテープを忘れてきちゃつた。そしたら会場で、うわーって言つてパニック起こして泣き出したんです。それを見て、僕はすつと行つて、「君は幼稚園の子?」と言つてやつたんですよ。そうしたら泣きやみましたね。だから、やっぱりはつきり言つてやる必要があるんですね。泣いたら慰めてもらうことが癖になつていては駄目なんです。

上田 そうですね。

陰山 結局教育の最終目標つて自立じゃないですか。そのためには苦しい場面もあるんだ、そのへんにユートピアはないんだということを最初に知つておけばどうつてことはないんですよ。不思議なのは、どんな大人だつて傷つかないで成長してきた試しはないのに、子供のことなると途端に失敗しないように、傷つかないようにと面倒をみてしまう。

上田 子育ても教育もそうですが、本当にあらゆることが、一に戻らないと駄目ですね。足元から改革していくないと、ということですね。

陰山 単純に夕方七時に父ちゃんが帰つてきて、みんなでいつしょに食事をする。それを例えれば全国でバロメーターとして調べればいいと思う。会社が協力するのか、しないのかつて。もちろんそれで経済活動ができるのか、というお叱りを受けるかも知れませんが。

毎日でなくとも、こういったことを真剣に取り組んで欲しいと思うのです。そうしなければ、子供の存在を許さない社会になるわけだから。今後も少子化は続き、日本の国力も弱まるでしょう。まず子育ての喜びを思い出さなきやならない。何年か前に父の日に、当時の文部省が財界に対して、「お父さんを家庭に返して下さい」とやつたんですね。僕はこれにはなかなかやるじゃないと思った。だから僕はね、決して文部科学省批判をするつもりないんですよ。批判しても意味はない。それよりもまず自分が提案すること。わが子を良くしましょう、まず自分の学校を良くしましょう、まず自分たちの地域を良くしましょう、っていうそこからしか始まらないだろうな、と思います。そのところだと思います。

上田 もう一度一から出直しですね。

陰山 少子化の一・五人というのは破壊的でしょ。だから僕は教育問題とは何ぞやと言つたらまず出生率なんです。学校から子供がいなくなる、このことの背景にある意味を噛みしめていかなきやいけないと思います。

上田 そうですね。それと各親、各先生がいいものはいいと頑固親父、頑固先生を通して欲しいと思います。うちの学園でも基礎学力定着の時間割を取り入れていますが、これからも陰山先生にご指導いただきたく思います。

了